特116
706

繪馬
現在七面
昭君

六

始

4弄116
706

繪馬 概説

別能六巻ノ一

一臣下伊勢太神宮に參りしに、折ふし節分にて繪馬をかくる行事ありと聞き、一見せんとて逗留しけるに、二人の老夫婦出で來り、二つの繪馬をかけ爭ひしが、やがて二人共にとて民安全神德無窮の繪馬をかけ、何をか包むべき是れこそ伊勢の内外の二柱の神、夫婦と現じ來りたり、疑ふなとて入りけるが、月明らけくすみわたる頃、再び現れ、天照大神天の岩戸に隱れ給ひし時、諸神岩戸の前にて神樂を奏し、大神のうかゞはせ給ふを、手力雄命、岩戸を引開けし時の有樣など見せ、豊に治まれる御代をことほぎ給ひけり。

此曲前ハ擬ネ開カニ後ハサラリト謡フベシ

小書 寛之舞

役別	装束附	季	所
ワキ 勅使	大臣烏帽子(赤上頭撫) 縫紋腰帯 扇 着附厚板 袷狩衣 白大口	分節	伊勢国多気郡宮川村
ワキツレ 従者二人	大臣烏帽子(萠黄上頭撫) 縫紋腰帯 扇 着附厚板 赤袷狩衣 白大口		
ツレ 姥	面姥 姥鬘 無色鬘帯 浅黄縷水衣 繪馬持 着附無色摺箔 無色唐織	曲柄	謡古順
前シテ 老翁	面小牛尉 尉髪 尉扇指ス 繪馬持 着附小格子 白大口 茶水衣 繊子腰帯	能 (物語神)	脇 (目醤初)
後ツレ 天女	面連面 天冠 黒垂 縫入腰帯 着附摺箔 紫長絹 緋大口		
後シテ 天照太神	面増 髪ズベラカシ 縫入腰帯 扇 着附白綾 白單狩衣 緋大口		準高等之部
後ツレ 天細女命(謡ナシ)	面三日月 黒垂 透冠 紋付腰帯 扇 着附厚板 法被 半切 袖枝(四手付ケ)持		

作者不詳

繪馬

ワキ勅使朗カニ

ワキツレ二人ヒカヘ

真次第上ノリ

拍子ニ合

治め給ひまゝに世を守る。治めしまゝに世を守る。伊勢の宮居に参らん

ワキ詞サラリ

そもそもこれは當今に仕へ奉る臣下なり。きそもこの度伊勢西宮へ数の御寶を奉らせ給ふにより。勅使として唯今勢州へ下向仕り候

繪馬

道行三人上朝カニ

風は上にある松にあらや。風の上にある松
本や。雲雀落ち来る栗津野の。
草の茂みと分け越えて。元ヘ戻シ元ル瀬田
の長橋打ち渡り野路篠原の草枕。
夢も一夜の。旅寝かな夢も一夜の
旅寝かな　平行　元ヲカヘサラリ
急ぎは程よ。それはたや
筑紫宮に着きて。今夜は節
分よ。この處に逗留し。
繪馬を掛くる者とんだやとなじい
申し仕向。今夜この處に逗留し。
繪馬を掛くる者とんだやとなじい
と。去年とやいたん。年のくれ　それ
馬と華の野に放ち。牛を桃林に

シテ射二人上ル姫真ノセイ　地ヲ三合ハズ

あらたまの春は心と若草の。狩も
久しきの恵かな　ツレニノ句ヒ元リ
歌も雲も立つ春
二人祈ヘテ　甲上ト　シテ廿上ル

繫ぐ事。皆聖人の諫かな。それかしこき世の習。時よ引かれて四方の海の濱の真砂と數へても。君が年のある數とたゝへてもあな有がたや

○小謠 拍子二合

「る早ぶる神代と関けべ久方の。天津日嗣の代々古りて。人皇代の子孫まであり

「恵と受け継ぎて。治まる御代

「われらまで。乃ぞ君を仰ぎつゝ

夜晝仕へ奉る夜晝仕へたてまつる

早笛

「いかよそれなる人ぞよ尋ぬべき事のあり

シテ

「汎方の事にてあるぞ

「夜ゐこの處よ絵馬を掛くると申しは

「真にてあるか

シテ

「さん

馬と掛けはよ　それは何の得よ依つて掛けられはぞ　これはたゞ一切象生の愚癡無智あるを像り。馬の毛により明年の日と相しーよ雨降き年とも心得べきためまてはは　夜つめ　ある絵馬を掛け。明年の日と相し絵　掛　はいづれも等け

れどもまづ雨露の恵をうけ。民の心も勇あるよみだの黒の絵馬を掛け。國ゞ豊よあすべきあり　暫くば。耕作の道の直あるをとそ。外慮も悦び絵べけれ。まづこの耐か絵馬を掛け。民と悦びやと思ひ　やうで遅と宣たゞ。沙汰も更よ

劣るまじ。力をもいれずして。天地を動し目よりぬ鬼神の猛き心と和ぐる。歌の八雲とさきくして。天ぎる雪のあべてふる。是等の如何で嬉しべき、

シテ（元ヲカヘ抑ヘメニサフリノ）

かくしも互に爭つる。隙行く駒の適行かじ。いざや二つの繪馬と掛けて。萬民楽む世とおさん　ツレ（げ）おいたれ

たりこの程の一つ掛けたる繪馬あれども、シテ（朗カニ）今年始めて二つ掛けて。雨も降り　ツレ（日）も待ちて　シテ（民）世楽の　ツレ（御）惠と　上（月）（元）かけまくも畏や。

○小謡

これもとて頼む神垣よ。繪馬は掛け　上（ヒラカヘ朗カニ）たりや。國ゴ豊ゴよ　甲　あさうよ。　上（ヒラカヘ朗カニ）賀茂の御生の引抑の日。賀茂の御生

○曲留近独吟

の引抑の日。これもあえて侍隨身。色めく紙の四手つけて掛けあらべたる駒くらべ。掛けてやさしく向えしの松風の上の藤波。尾上の花よ咲き添へて。たゞひく白雲又掛けて色もとまず。あり。僧正遍昭の。歌の様の得たれども。加まさく。あり。蹄へぐ。淪ふ畫ける

遊女の姿よめでく。徒よ。心と動すの。清緑糸よりかけて。繫ぐ駒は二道。掛けてあかなかり恨みしの。岐路の空。情逢ふ。夢の手枕。明ぬ今宵。のあらもれて。言葉をかたすこの上。行とか。色出べきわれらは。伊勢の二柱。夫婦と現ぜ立づる。信ずべ信ぜ

は疑彼の川竹のよ。夜も明け行かべ内
外ふて。待ちえてまみえ申さんと夜
宵に紛れて。失せにけり夜まにま
ぎれて失せ、けり。中入来序

上地出端 雲は萬里よ治りて。月讀の風神の。
後シテ天異太神 われの日本秋津島の大揉梁。地祇五
代の祖。天照大神上遊 和光利物の序
農瓔珞の。和光利物の序農瓔珞の。
水と跳立つる彼の如し。されども拾の
虚空よ備ち来る五色の雲も。輝き
出づる日祇の序。なりかたや上歌
シテ中 和が齋宮の名よ古りし。前の齋宮の名
古りし。神垣しどろよ木綿幣のあら

たゝ神體あらはれ給ふ。有かたや（中之舞）

シテ上ノ詞ニノリ 昔。天の岩戸は閉ぢ籠りて。天の岩戸は閉ぢ籠りて。惡神を懲しめ奉らんとて日月（合）二つの御影を隠し。常闇の世のさていつまでか。あらぶる神ぞ。それを歎きていかにも御心。どるや榊葉の。青和幣。白和幣。

色々様々よ歌よ神樂の韓神催馬樂。

（天女神舞 カ神急舞）

シテ上ノ詞ニノリ 面白やと覺えず出。面白や地ノリ 初もて白やと覺えず出。戸をすし閉いて。感じ給へ。つまで出戸をと手力雄の尊の引き開け御衣の袖よすがり。引き連れ現れ出で給ふ。有樣。ゑ珍しき

神遊の面白かりしと。思しめし
忘れず高天の原よ祈とぎまつて。
天地二度開けぬ治り國土も豊
て月日のその。長閑けき春こそ。
久しけれ

現在七面　概説

別能六巻ノ二

日蓮上人甲斐國身延山にて讀經禮讃をはげむ處に、女性一人來り、聽聞する殊勝さに名を尋ぬれば、女は龍女成佛の御經を説きてたまはれと請ふ。上人即ち提婆品を説き給へば、女感ず入り、願はくば其の如く妄か三熱の苦をも脱れしめ、成佛の縁を授け給へと言ふに、其の誰なるかを問へば、七面の池に年經て住める蛇身なりと答へ、消え失せしが、後に本體を現し、上人の法力に依りて女人と変じ、今より後は此の山の守護神となるべしとて喜び歸りけり。

此曲前半ハ開カニ後半ハ朗ラカニ謠フベシ

役別		装束附
ワキ	日蓮上人	花ノ帽子　白鍵　差貫　水晶珠数　經　扇　込大口　紫水衣　掛絡
ワキツレ	従者二人	角帽子　着附無地熨斗目　白大口　縷水衣　腰帯　扇　数珠
前シテ	女	面深井　鬘　髪帯　着附摺箔　唐織壷折　縫箔腰巻　扇
後シテ	龍女	面般若　白頭（黒垂下ニ着ケ込ム）　大龍戴ク　着附鱗箔　法被　紫大口　腰帯　襟　扇　打杖　物着ニテ装束左ニ変ル　面増（短黒）　天冠（立物月輪）　黒垂　着附箔又ハ無地熨斗目　大口（前ノ通リ）　舞衣　幣持

季	不定	曲柄	四五番目 略脇能
所	甲斐國南巨摩郡身延山久遠寺	誓願順	四級

現在七面

作者不詳

ワキ僧サシ上ツヨク用カニ朗カニ拍子合ハズ

それ世尊の教法の五時八教よ配立し。
権實二教よ分てり。さる程よ滅後の
弘經も正像末よ次第して。今後五
百歳の時、あれば時機よ適ふこの妙
經と弘めつ。國土安全の願をおせ
しそのかひの。身延の山よ引き籠

り。寂寞無人の樞の内には。讀誦
洗鉢の聲絶てえず。心三觀の窓の
前よは。第一義天の月まさかあり、
○小謠 上ゴ月 埋ミ合ヨウ 用カニ覓タリ
尾上の風の音までも。尾上の風の
音までも。皆法の聲ならずや。
落ち離つ瀬の響もたゞ懸河流
深の序聲にて。鷲の峯山も餘所
あらず。巻の法の花の紐。時刻る
風よ立ち渡る。身の塵雲も晴れ
ぬれば心の月ぞ、すゝやかなる。
ぞすゝやかなる。用メル心 ワキ詞 元ラカヘ用カニ
われ法華修行の
身あれば。讀誦禮讃を怠る事あ
きけよ。いづくともなく女性の絶
えず指で作。今日も又暮りてゆく。

シテ次第　女上用カニ　撞シモリ

名を尋ねざやうと思ひい

法の教を身よりけて。法の教を

身ようけて瓶の道よ入らうよ

サシ上伸ビリト用カニ　拍子ニ合ハズ

有難の霊地やあ。僕ばよてい四明の洞

和弧みてい我が立つ松と緑じけん。

時ふもいかでまるべきさてよ大白。彼

水井の河風よ。彼の立ち居もあの

づから。随縁真如と。顕せり　下ヲ中気フカヘ用カニ　拍子ニ合ハズ　切カヘテ谷の

戸出づる鶯も。法を唱ふる花の枝

○小謡　上ヲ伸ビリ

○我てもんよ。身延の山の深雪だよ

身延の山の深雪だよ。春を迎へて

消えぬれば。「慧日の光かと思へ

ば我が作りし罪科も。かくこそ消

えぬ頼もしやと。信心いやまして

げに有難き。庵に山かげに有難き
庵かな。（口ずさみ）あやしやこの山に花
より外に知る人もなき庵にて。
そもや女性の御身あがら。御経
読誦の折ふしを。歩を運び花水を
供に捧げ給へ。さておさてはなほ
ある人なるまじ。（シテ）これは

このあたりに住む去あるかかく有難
き庵法に逢ふ事。盲亀の浮木優
曇華の花待ち得たる心地して。悦
の涙の露。（地）なるおしも縁を結び。
後の世の闇を晴さずや。いつの
世を松の戸の。明暮歩を運びつ。
上人に結縁をなすばかりあり

（上平）げに尊き信心かな。この法華経を保ちぬれば。若有聞法者。無一不成佛と説き給ひて。二乘聞提惡人女人たりとなめて。成佛する事。疑おし

○小謠

（上平）（用カニ）（柏子三合）（シテカッテ）さてはの殊更有難や。その名をだにもまだ聞かぬ。そのの名をだにもまだ聞かぬ。南法と既に保つまでいかで奚

（用ん心）を結びけん。（用）（ウえへ長）げに頼もしきわからや猶も女の佛とあるを。（中）（用ん心）（シイト）ましませ。（平）（用カニ）あかなかの事草木國土悉皆成佛の法華経なれば女人の助かりたる所をも語つて聞かせいべし

（クリ上地伸ミト）（柏子三合ハ）（ツヨク）そもそも法華経といつて。釋尊久遠劫のその昔。初成道の時悟り

○サン曲独吟

得給ひし妙法蓮華経なり。弘るに
華厳の朝より、般若の夕に至るまで。
日蓮ヒラ付ケ
抑止在懐し給ひて種々の方便機に
随ひ給ふ事と説き給ふ中に十界
差別含まちまちなり。
拙子ニ合セト拙用カニ
されば狂人の
は。外面は菩薩に似て。内心は夜叉の
如しと嫌はれし。その言の葉ともろ

もろの経の内よし。陸奥の安達が
原の黒塚や。荒れたる宿のうれた
きよ。假へも鬼のすたくなるし。詠み
しも女の事とかや。かゝる憂身の
浮まん事いつの時とか松山や。独よ
度の波都えて。作り重ねし罪科
を。悔の八千度身をかこち。佛の御

法の言の葉さへ恨しとのみ欲き
けり（ロキ上朗カニ）勧るよこの法華経の佛七十
余部よて。始めて玩ませ給ひしこそ
よや一味の法の雨。等しく鮮く潤
ひよ。敗種の二乗闡提も皆同じ悟
と得。殊よ女殊の教よて。龍女は須
臾よ法をえて。この世あからの身と

捨てず。本の悟の古里よ。立ち帰る
有様や。錦の狭なるらん（ロヒギ上朗カニサラリ）この妙
典の理をとくく唐糸の一筋よ。作ぎ
て保ち給へや（甲シテ上用カニ）有難の御事やそ
わらわも蘭なき。法の水と手よ
掬び。絶えず苦しき三熱の。焔と早
く免かれん（上地サラリ）そも三熱の苦しみと。

免かるべしと宣まひつゝ。御身の霊
神の。假まみえしなりたるや。今の行を
かくむべき。われは七面の池よ。住む月
並の數知らぬ。年經たる蛇身なり
地上 さらば懺悔のそのためよ。本の姿を
みせ給へ。恥しながら報恩よ。あり
し姿を現さんと。夕風も烈しく。立

つや黒雲の。行方も早き雨の脚。踏
み轟かし鳴神の。稲光して冷しき。
音に紛れて。失せにけり音にまぎ
れて失せにけり 中入

ワキ上哥 三人待謡 ○切遣 囃子 ○かゝる不思議に逢ふ事も。かゝる不思
議に逢ふ事も。たゞこれ法の力ぞと。
心をすまし ひたすらに。讀誦をなして

侍ち居たり読経痛と申して侍ちあたり、
あらず思議やあらまでつ。あらず思
議やあらまでつ。妙よ優あるあ人と
ゝえつるかさも珍き大蛇とあつて。
日月の如くなる眼と開き。上人の高座
と幾重ともあくくるくると引き纏
ひ。慙愧懺悔の姿と現し、高座へ頭

をさしよせて、瞻仰してそ。あたり
はれ遍 日半中 用カニ朗カニ その時上人御経を取り上
げ。その時上人御経を取り上げ。於
須臾頃後ろ覚えし。高らかよ。昌へ
給へ。ち蛇身を哀しつ。物着ヨリ 忍ち
蛇身哀しつ。如我等亜異の身とお
れば。空よりの紫雲たなびき。四種の花

み。虚空よ音楽聞えきて。ぞねかば
敬よたぐふ。報謝の舞の袂も。
異香薫じて吹き送る。松の風。
の鈴の音も更け行く夜半の月も
霜も白和帯。ふり上げて。聲すむや
鶯の山。いかよすみける。風なれば

後ンテ龍女上ル　柏子ニ合ハズ　太鼓ノ合
謹上　再拝　神楽
シテワカ上ル　伸ビリト朗カニ
就鶯の山。いかよすみける。風なれば

○独吟
○仕舞

地中サラリ　甲　元
入りての後も。世を思すらん
シテ中用カエ　ヨワク
嬉しや。嬉しや。
や。妙。経信受の功力。
月　重ヒヲ甘ケ
の功力。三身圓備の。妙體と受けて。
和光同塵。結縁の。姿と現し。変跡
示現して。この山の。鎮守となつて。火
難水難もろもろの。難を除き。七猫
則生の。誓を。備てしめ。やと重ねて

衆生と廣く。佛度せんと。約束堅
くやしつ。行方も白雲よ。立ち紛れ
て。虚空より上らせ。給ひけり。

昭君　概説

別能五卷ノ三

唐土合浦の里に白桃王母といへる夫婦の者、昭君といへる美しき女をもちしが、召出されて天子に寵せられしも、胡國に遣されたるにぞ、父母の歎き一方ならず。里人の訪ひ慰むれば、昭君胡へ赴かんとせし時、我空しくならば枯るべしとて植置おきたる柳の下に佇み、早や片枝の枯れ初めたりと歎きつ、其の胡へ遣されしは漢、胡との戰を和せん爲め胡の大將單于に送りしなりと語り、鏡には戀しき人の映りしに例あればとて、鏡を出し見れば、單于、昭君の姿うつろへり。單于は己が醜き顏ばせを愧ぢて立ち歸りしが、唯昭君の黛のみは柳の色にまざくと殘りぬ。

此曲前ハ閑カナレドモ後ハ強ミニ謡フヲ宜シトス
小書　舞働

役別		装束	附
ワキ	里人	着附厚板　側次　白大口　腰帯　扇	
ツレ	王母（姥）	面姥　鬘　鬘帯　姥髪　着附摺箔　浅黄縷水衣　唐織着流シ　笘持	
前シテ	白桃（尉）	面阿古父尉　尉髪　着附小格子　茶水衣　繻子腰帯　扇指ス　笘持	
子方	昭君	天冠　色鉢巻　着附摺箔　扇　唐織壷折ニテモ　紫長絹　緋大口	
後シテ	呼韓邪單于	面小癇見　唐冠　黒頭　黒鉢巻　着附厚板　半切　紋附腰帯　修羅扇　法被	

季所		曲柄	目番
三月	唐土のほうの里	四、五	目
		誓吉順	一 級

昭君

ワキ里人ヲ出サリ

これは唐土の里に住居する者にてはべるそもその處は白桃王母と申す夫婦のはべるが一人の息女を持つ。その名を昭君と名づく。所の門よりこれを寵愛限りなかりしが所よりて胡国へ遣されし

禪竹氏信作

て仮夫婦の人の歎たぐ世の常なら
ず迎陪の事にてはあれよ立ち
越え訪はばやと思ひい

シテ二人ツレ姥セイ上 ヨワク柏子ニ合ハズ 数りかくる花の木蔭よ立ち寄れば
空よ知られぬ雲ぞ降る シテサシ ツレ 是は
唐土かうほの里よ住居する白桃
玉母と申す夫婦の者にてはあり

ツレ上 かほどよ賜はりきの身あれども美名をあらそふ娘あり。昭君とかれを
名づけつ容顔人よ勝れたりぬれ
ば帝都よ召されて後明妃とその名
を改めて天ふまみえたてまつる
シテ上 かほどいみじき身あれども。あほも
前世の宿縁。離れやらぬる故やら

二人運ビナニ諸人の中より選つられて故國の民に遷
され。漢宮が里の邪ふして。人馴れ
ぬかたの旅の空。思ひやるこそ悲
しけれ　シテ中用カニ　引れぐも供奉の宮人ども。
旅行の道の餘めにて。絃管の數と奏し
つ。馬上ニ人中運ビヲ上ケ　琴琵琶を彈く事もこの
時よりし聞くものと　上ヲ中気ヲカ人用カニ　畫圖よう

つせる面影も今こそ思ひ知られたれ
上ヲ折ヘテ　○小謡　かの昭君の黛は。かの昭君の黛の
緑の色よ白ひも。春や深るらん
糸柳の思ひ乱るる折ごとに風流
共よ立ち寄りて水陰の座を拂
ひん水陰の座を拂ひん。　シテ上気ヲカケハツキリ　いざ
いざ庭を清めん。祖父の幕をたづ

さへたり、つれなげにや心も昔の春。老の
姿もさながらの。いと苦しとは思へ
ども。風結ぶ。底の油のむだもき。
かゝる思もるは故あり、たゞ世の
常の賤の男と。人もやゝるらん恥
かしや。日の山の端よりり相の
かねて知らすする嵐。つれなき油寒しと

シテ用カニサシ柳ヘル心

思へども、シテ五ニツメ
のためあれば、つれなむ
からず、中
シテ二人用カ柳ヘテ次オ上
柏子ニ合
嵐の積る木陰よや
ツヨク心持ヲツケテ
嵐も。塵とありぬらん。
用中ニ用カニ
嵐塚の
積る木陰よや。嵐葉の積る。ホ
中用ん心
陰よや嵐も。塵とありぬらん
上ニ用カニ
ホ謡
げに世の中に憂き事の。
中に憂き事の。げに世の
中に憂き事の。心よかる塵の身の。

拂ひもあへぬ袖の露。涙の数やつ
もるらん。風は散り。水は伏ぼむ露
塚とも。暫し袖は宿さん。涙の露
の月の影。涙の露の月の影。それ
かくこそ思ひもあらで。小笹の上の
玉霰。音もさだかは聞えず。あま
りは苦しう侍る。休まばやと思ひ

ワキ いかにこの家の内は白桃のわたり
いか。誰にて御入り候ぞ。いや某が
参りては。こなたへ御出でいへ。いかは
申しいさても昭君の御事は心中察
し申してい。御馬ひ有雅うい。又申
すべき事のいこの柳の木の下を立
ち去らずして待ち給へ。行と中し

居る御事にてゐぞ（シテ）昭君胡國へ遷
されし時。この柳を植え置きわれ
胡國にて空しくあらば。この柳も枯
れうずると申しつるが法（カ）験（ケン）見えべし
や。枝の枯れて作（イ）（ナリ）げよげよ御
歎きむなしてゆ。さてさて昭君は何
しに胡國へ遷され給ひ作ぞ

シテクリ上サフリ
（ツヨク）さても昭君胡國へ遷されしその
古（イニシヘ）を尋ぬるよ。天下を治（ヲサ）め給（タマ）ふ
あり。（ナリ）（シテサシ上用カミ）幼（オサナ）れども胡國の軍（イクサ）をはう
して。後（ノチ）の事（コト）朝（アサ）雖（ガ）ざれば互
に和睦（ボク）して。その印（シルシ）（ヒト）つあかからん
やとて。美人（ビジン）（中ヅ）を二人（ニニン）つかはすべき御
約束（ヤクソク）（ト用ん心）のありしに（ナリ）（切）（ナリ三合）そも漢王の宣

○サシ曲独吟

旨にて、三千人の寵愛。いづれをわ
くる方もあり。もろもろの宮女の
好色、紅衣の姿を、賢聖の障子にて
似せ絵よそれとあらそ。中よ劣れ
るさまあらべ。即ちかれを選みて。胡
王のために遣はす。天下の運を鎮
めんと。論言あらせ絵へべ。數ぞの

宮女たち。それをいかにと、悲み
絵かける人を語ひ。皆賄賂を賜り、
つ。御約束のありし故、それべ
写せるその姿。いづれをこんるも好
よして。柳髪風よたをやかに。桃
顔露を含んで色あ深き深あ
り。中ふも昭君は。並ぶ方なき美人

入て。帝の夢にたりてあり。そ中ニカレユルメ　中改ラ典
れを頼める故やらんたゞうち解
けてありしに。畫圖よ寫せる面影
の。あまりいやしく見えかばさ
てそ元は寵愛。甚しと申せども。
君ゆよ私の。詞あるやうに思ひけん
かなくして昭君を胡國よ送り

遣はさる。シテ用カニ　昔桃埜といひし人仙
女と契り侍からざりしに。仙女空し
くありて後。桃の花を鏡よ映せ
ば。即ち仙女の姿ゑえけるとあり。
別ニ出シ確カリ
この柳もさなかから昭君の姿いざ
させ給へ鏡に映して影をゑん
ツレ上サラリ　柳子ニ合ズ
それは仙女の姿ありいかでこれよ

譬ふべき、シテ月柳ヘメニ用カニ いやそれのみあうず鏡
よ月。戀しき人のつるあり ツレカル上サラリ 夢の
姿と映しゝ月 シテ月用カニ きんやうが持ちし
ます鏡 ツレ上サラリ 古里と鏡よ映しゝ月
シテ月用カニ とけつゝいひし 指人リヨジンあり ツレ上サラリ それ
月は昔よ年と経て シテ ツメテ 花の鏡とある
水と 月ハ人サラリト進ム心 数りかゝる花や曇るらん 地ノ三合

思ひかゝるまする鏡。もしも姿と
ツレ 静メ
ゝるやと。鏡よ向つて泣き居たり
トクト用ノ 鏡よ向つて泣き居たり 中ノ 中入
子方昭君上サラリ 一声 又ハ出端ツヨク 地ノ三合ハズ
これは胡國よ憂され。王昭君の
幽魂なり。さても父母別れを悲み。
春の柳の木の下に。泣き悲み給
ふ痛ワさよ。急ぎ鏡よ影と映し。

父母に姿と見え申さん。春の夜の朧月夜よあらはれて曇り
あがらも影ばかりえん（早笛シテ出）恐ろしや鬼
とやいさん面影の身のももよだ
つばかりなり。いかなる人にてまし
ませば。鏡よりの映り給らん
（後シテ拝手ニテ引張ル）これは胡国の夷の大将。呼韓邪單
于が霊なり（ツレ上リ）胡国の夷の人間
なり。ただ人にあらず。目には
見ねども音に聞く。冥途の鬼か
恐ろしや（シテ中手ヲ引張ル）呼韓邪單于も空し
くなる。同じく昭君が父母よ。対面の
ためよりたり（ツレ上リ）よしなかりける
対面かな。姿と見るも恐ろしや

シテ詞 手拍クカシツテ
そも恐るべき謂はいかに
ぬ我が姿。鏡よ寄りてよく見べとよ
シテ 大キク寛タリ下
いでいで鏡よ影と映さん。真よ乱
○獨吟
○仕舞
疎き姿と。詞ルメテハツキリ
鏡よ立ち寄りよくよく
カル上ニ手拍クサラリ
見れば。恐れ給ふもあら道理や
ノル詞
太鼓頭
荊棘と戴く髪筋は
シテ 確カリ
主と離れて空よ立ち

地
元結更にたまらねば
シテ中 確カリ
されば葛にて
結びさげ
地
耳よ付鎖とさげたれ
シテ ヒルカケ
ぞ
鬼神と見る
詞サラリ 以下進ム心
姿も恥かし
鏡よ寄りそひ立つても呑ても。鬼
とは見れども人とは見えず。その身が
あらぬかわれあらば。恐ろしかりける
結ブル心
顔つきかお面目。とて立ち帰る

キリ中ニ元ヲカヘサラリ
猶子ニ合ズ
頭ニ当ル

たゞ照君の儘つゞ照君の儘つゞ杯の
色に異あらず。羅をあらたす浄波
瑞つゞれも隠つよもあらじ。花かと
見えて曇る日つゞ空ある物思
ひつゞ影もほのかよ三日月の曇らぬ
人の心てそつゞ誠をとうつす鏡あれ
とうつす鏡あれ。

270
692

大正拾年九月一日印刷
同　年九月五日發行

訂正著作者　京都市上京區二條通麩屋町東北角　廿四世　觀世元滋

發行兼印刷者　京都市上京區二條通麩屋町東北角　檜常之助

發行所　東京市神田區錦町一丁目拾番地　檜大瓜

印刷所　東京市四谷區傳馬町貳丁目　江川堂

藩謠作樂權所
許不許

終